

リレーエッセイ「橋本道夫先生と私」(第11回)

若者を大切にする信念の人



(公財)日本産業廃棄物処理振興センター 理事長 関 莊 一 郎

橋本先生に初めてお目にかかったのは1978年4月、環境庁に入庁して大気保全局大気規制課に配属された時だった。橋本先生は大気保全局長で、新入職員だった私に仕事に取り組む心構えを、やや早口の独特な口調で、熱く語られた。新入職員と局長では天地の差があり、緊張して話を聞いたのを思い出す。橋本先生の訓示は、他の先輩の話とは趣が異なり深く心に刻まれ、その後の私の職業人生に大きな影響を与えた。それは、「一担当者であることなどにこだわらず、国や国民のために良いと思ったことはどんどん提案し、実施しなさい。新しい視点、新しい発想が大切だ。失敗を恐れずに前に進め。役所というところはネガチェックに優れた人はたくさんいるが、新たな発想・行動の人は少ない。やろうとしていることが、国や国民にとって良くないことであるなら必ず上司が止めるから心配するな」というものだった。若者の新たな視点、発想、行動力に大いに期待を寄せておられた。失敗は恐れず果敢に進め、骨は捨うとの意も込められていたと思う。

橋本先生のこの「教え」を原点の一つとして38年間、環境庁・環境省で、常に新人の思いで新たなことに挑戦することができた。新入職員の時に橋本先生の薫陶を受けることができたことは、振り返ると、私の大きな財産だった。後年、環境省で新入職員に訓示する立場になった時、橋本先生の思いを伝え、若者の活躍に期待を寄せてきた。

橋本先生は、私が入庁した年の夏に環境庁を退官された。最後の大事な仕事は、二酸化窒素の環境基準の改定で、従来の基準値を「緩める」改定だったので、反対する団体が連日環境庁に押し寄せ騒乱状態だった。当時は、会場整理等の力仕事は新人職員の役割で、何が起きているのかの全貌はよくわからなかった。後年、公害対策や公害患者の救済を進めた橋本先生が、患者の方々の大反対の中でも、新たな科学的知見に基づき対策の根幹となる環境基準値を改めるにはばかることがなかったのは、橋本先生の一貫した哲学と信念であると理解できた。

橋本先生とのもう一つの思い出は、開発途上国への環境援助である。日本の環境対策が世界的にも高く評価され始めた1980年代に、アジア諸国から深刻化する環境汚染解決のための支援要請が増加してきた。1985年5月に外務省、JICAは橋本先生を団長とする調査団を、タイ、インドネシア、マレーシアの3カ国に派遣し環境援助要請の内容を調査。これが日本の本格的な環境援助の始まりだと思う。

この調査団の提言を受け、最も熟度が高かったタイに長期専門家を派遣することになり、同年12月に私がタイの環境庁に派遣された。2年3ヶ月にわたり悪戦苦闘しながら日本の環境対策の経験・技術を移転するプロジェクトのマスタープランを作成し、橋本先生をはじめ多くの方の支援を得て環境研究研修センターとして結実し、日本の本格的な環境援助プロジェクトの第一号となった。橋本先生は、私が専門家としてタイに滞在している間も、その後、このプロジェクトが実施に移される間も、一貫して支えてくださった。

インドネシア、マレーシアにも、その後、環境庁職員が派遣され、環境援助の黎明期となった。橋本先生の途上国の公害問題解決への強い思いが結実していったのだと思う。橋本先生は、1990年に設立されたOECCの初代理事長に就任され、途上国の環境問題解決に名実ともに先頭に立って取り組まれた。その後、環境援助のみならず地球温暖化問題等の地球規模の課題にも尽力いただいたことは、このリレーエッセイにもしばしば登場している。

橋本先生は、常に現実を冷徹に見据え信念を曲げない、まさに「Man of Integrity」の人だと思う。空論ではなく、現実を踏まえて方向性を示し行動するので、多くの人々の心を打ち、波動を広げたのではないか。後年、国際会議で発言される際には「This is reality」を連発しておられた。もっとも橋本先生らしい一面と、感嘆したのを今でも思い出す。